

2026 年度未来構想方式 第3日程

【課題】

みなさんは、今、2040 年 2 月 5 日の日本にいます。以下の課題文は、日本のある地域の 1960 年代から 2040 年までの歴史的な変遷を記しています。図表を参照しながら課題文を読み、設問に答えなさい。

[未来市の概要]

未来市は、岡山県北部最大の都市である。JR 岡山駅から快速電車で約 1 時間、岡山県の海岸部から山陰にかけて内陸に入り込んだ盆地にある。中国山地のなかにあって未来市だけが平地の多い地域である。周囲を山に囲まれ、河川もあり、防衛上の立地の良さから江戸時代には 10 万石の城下町として栄えた。同時に瀬戸内地方と日本海とをつなぐ出雲街道の宿駅としての機能も持つ交通の要衝でもあった。年間の平均気温は 14 度、8 月の平均気温は 26 度で、瀬戸内気候の地域としては緯度も高く冷涼で過ごしやすい地域である。

[未来市の歴史]

1960 年代

- ・ 中心市街地は県北最大の商業地であり、広域から買い物客を集めた。未来市には食肉処理場があり、牛肉の流通拠点となっていた。市内には精肉店や焼肉店が立地し、家庭ではもつ煮やホルモン炒めなどが日常的に食べられていた。
- ・ 未来市には、未来城や城下町の景観があり、街の名物行事である大名行列には毎年数多くの観光客が押し寄せた。
- ・ 市は『いずれ木材の山になる』を合言葉に造林を推進し、林業が地域経済の一翼を担っていた。高度経済成長に伴う住宅建設の増加により、木材需要は右肩上がり伸びていった。

1970 年代

- ・ 中国自動車道が開通し、関西圏へのアクセスが良くなったことで移住者が増え、未来市の人口は増加していった。幹線道路沿いに飲食店やホームセンターなどの商業施設が次々とオープンしていった。市は、人口増加に伴って税収が増えたことから、総合体育館やプール、図書館などをつぎつぎに整備していった。
- ・ 市内に飲食店やスーパーマーケット向けにハムやソーセージを製造する小規模な食品加工メーカーが増え、牛肉文化を背景に食料品製造業は地域産業の一翼を担うようになった。
- ・ 植林した人工林が伐採期を迎え、市民の間で「林業は儲かる」という期待が高まり、林業に参入する事業者が増えた。他方で、この頃から日本には外国産の木材が大量に輸入されるようになった。

1980 年代

- ・ 大手ショッピングモール運営会社から未来市への出店計画の発表があった。市民は大型店の出店を喜んだ。市はショッピングモールの開店に伴って人口がさらに増加することを見込んで、市立病院の建設を計画した。
- ・ 1988 年、焼肉のたれ等の家庭用調味料のトップ企業であるエバー食品工業が、西日本向けの供給体制強化を目的に、未来市内に工場および物流センターを建設することを発表した。エバー食品工業は、未来市が台風などの自然災害が少なく、地震被害も少なく、中国自動車道の開通により西日本一円への配送に優れている点を高く評価した。工場は、地域の雇用を支える存在となった。
- ・ オイルショック後の省エネ・省資源志向、鉄骨造・RC 造の普及により、木造戸建住宅の比率がじわじわと低下し、木材需要は頭打ちになった。もっとも、経済成長は持続しており、合板・パルプなど工業用需要は一定水準を維持していた。

1990 年代

- ・ 市の郊外にオープンした大型ショッピングモールは、多くの買い物客を集め、市民の生活になく
てはならないものになった。週末に車でショッピングモールに出掛ける家族の姿が数多く見られ
た。他方、中心市街地の賑わいは失われていった。市は市街地の活性化を目的に地元食材を
扱うマルシェを開設するなど対策を講じたが、目に見える成果は得られなかった。
- ・ 未来市では昔から、焼肉のシメにホルモンうどんを一緒に炒めて食べる習慣があった。1990
年代後半、地元の飲食店主たちによって「未来ホルモンうどん」と命名され、提供店マップなど
が作成された。
- ・ 城下町エリアが国の重要伝統的建造物群保存地区に選定され、町並み散策型の観光客が増
加した。もっとも、観光客は城下町エリアのみを散策し、中心市街地の商店街に立ち寄ることは
なかった。
- ・ バブル崩壊によって住宅建設の需要が減少し、木材価格は低迷した。全国的に林業は採算割
れが常態化し、伐採期を迎えても「伐っても儲からない」として放置林が増加した。林業従事者
の高齢化が進行し、小規模な専業事業者の多かった未来市では、林業を廃業する事業者が増
えていった。

2000 年代

- ・ 未来市は高齢化が進行し、高齢者の移動手段を確保するために、住宅地とショッピングモー
ル、市立病院などを巡回するコミュニティバスの運行をはじめた。
- ・ 「未来ホルモンうどん」は、B級グルメのコンテストで入賞したことをきっかけに全国のメディアで
取り上げられ、土日にはホルモンうどん目当ての観光客も訪れるようになった。エバー食品工業
も、未来ホルモンうどん専用のソースを開発して、未来市限定で販売した。未来市の家庭では
「一家に一本」専用ソースがあることが当たり前になった。他方、家庭で手軽にホルモンうどんを
作ることができるようになったことで、店で食べる特別感が薄れ、飲食店でホルモンうどんを食べ
るのは観光客に限られるようになった。

- ・ 市は改めて観光事業に力を入れることを決め、未来城・城下町・B 級グルメ(未来ホルモンうどん)などを組み合わせた観光振興策を打ち出した。未来城で開催した「桜まつり」は、広域から観光客を集め、メディア露出により未来市の知名度向上に寄与した。
- ・ マレーシア・インドネシア・フィリピンなど木材輸出国の中で過伐採による天然林資源の減少が問題になり、輸出を制限するようになった。国は政策として国産材の利用促進を掲げ、未来市も補助金を支給して林業を支援した。もともと、木材価格の低迷から、補助金で間伐を行う以外に収益を確保することは難しく、未来市の林業は補助金頼りになっていった。

2010 年代

- ・ 高齢化と人口減少が本格化し、ショッピングモールの売上も頭打ちになる中で、若者の市外流出が続いた。中心市街地では空き店舗が目立つようになった。
- ・ 少子高齢化の進行により、街の伝統であった大名行列が担い手不足により中止になった。市は規模を大幅に縮小した代替イベントを実施したが、街の「にぎわい創出」の面では大きく後退することになった。
- ・ 市はなんとか地域を盛り上げようと、ホルモンうどんに続く「第二のご当地グルメ」を生み出すため、メニュー開発のコンテストを開催し、市内に住む主婦が提案した「未来ぎょうざ」がグランプリを獲得した。しかし、多くの飲食店はすでに自前の餃子レシピを持っており、確実な集客や単価向上が見込めない限り「未来ぎょうざ」を扱うメリットを感じにくかった。結果、「未来ぎょうざ」を提供する飲食店はごく一部に限られ、市民でも食べたことのない人が多い「幻のご当地メニュー」になってしまった。また、2010 年代後半になると、B 級グルメブームの終焉とともに未来ホルモンうどんの人気も薄れ、かつて長蛇の列ができていた専門店の閉店が相次いだ。市内には「空き物件」と書かれた貼り紙が目立つようになり、新たな借り手がつかないまま時間だけが過ぎていった。

2020 年代

- ・ 地元の不動産事業者が手掛けた「古民家を改修したゲストハウス」が SNS で話題になった。週末には県外からも宿泊客が訪れるようになり、周辺にカフェや農家レストランなどがオープンし、「おしゃれ古民家エリア」として注目された。
- ・ 市は地域通貨(自治体・商店街などが独自に発行する通貨)を発行し、地元経済循環を活性化しようとしたが、店舗側の人手不足と市の運営コスト負担から 5 年足らずで廃止となった。
- ・ 1960 年代の造林地が 70-80 年もの高齢林になっていたが、林業従事者の高齢化の影響もあり間伐がとどこおり、風倒・土砂災害のリスクが高まっていた。また、シカやクマなどの野生鳥獣による森林被害も深刻化していた。市は、未整備林・放置林の問題に頭を悩ませていた。コロナ禍で北米などの住宅需要が急増し、世界的な木材価格の高騰(ウッドショック)が起こったが、植林・育成・伐採のサイクルが崩れており、価格高騰の恩恵を受けることはなかった。

2030 年代

- ・ 「古民家エリア」はブームが一巡し、ゲストハウスの稼働率は低下し、カフェや農家レストランも平日の来客数の減少に悩まされるようになった。
- ・ 高齢化が進む中で、市は「歩いて暮らせる街づくり」をスローガンに、中心市街地に小規模店舗と公共施設を集約する方針を掲げた。厳しい財政状況の中、新たに複合施設を建設したが、思うように地元の出店者が集まらず、オープン後も空き店舗が目立つ皮肉な光景が広がることになった。
- ・ 2035 年、エバー食品工業は、建物・設備の老朽化、未来市の人口減少による人手不足を理由に、工場の閉鎖を発表した。市は雇用を確保するためエバー食品工業に工場の存続を訴えたが、決定が覆ることはなかった。物流センターは当面存続するということだったが、将来的な見通しは未定とのことであった。
- ・ 林業従事者の高齢化が止まらず、防災・水源確保の観点から市が森林管理に乗り出さざるを得なかった。しかし、財政的に余裕がなく、ドローン空撮による最新の森林管理手法を導入することができず、昔ながらの人による目視調査などによる森林管理を続けるほかなかった。

2040 年 3 月 6 日の状況

未来市は人口減少、高齢化に苦しんでいる。人口が 8 万人近くまで減少した市の産業は限られ、周辺の都市部への人口流出も続いた。数年前から大型ショッピングモールが撤退するという噂があったが、先日、ついに撤退計画が発表された。

未来市にはたくさんの魅力と地域資源があったはずである。未来市は、なぜこのような状況に陥ってしまったのだろうか。いつどのような策を講じておけば、このような事態になることを避けることができたのだろうか。市民は、すっかり活力を失った街の姿を眺めながら、これまで市が歩んできた歴史に思いを巡らせていた。

【設問】

問 1. 未来市は、林業、商業（小売業・飲食業含む）、観光業などを中心に発展したにもかかわらず、2040 年に存続の危機ともいえるような状況に陥ってしまいました。未来市の各産業が衰退した原因を、問題文の内容に加えて、あなたの知識・経験も踏まえて考察し、述べなさい。

※文章で記述すること（箇条書き不可、図や表の使用不可）。

①林業が衰退した原因

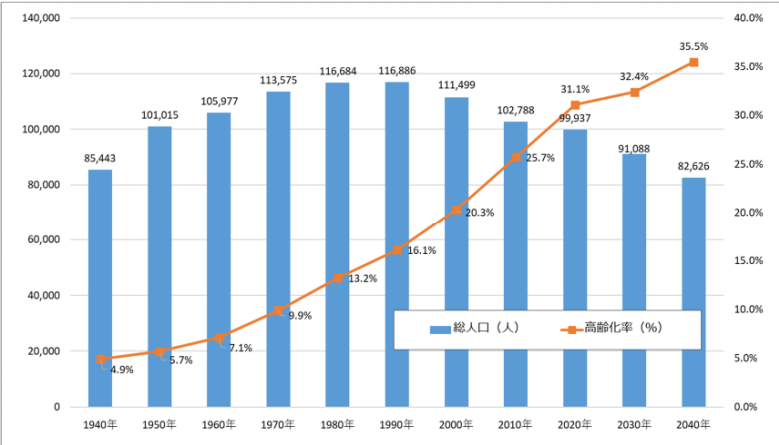
②商業（小売業・飲食業など）が衰退した原因

③観光業が衰退した原因

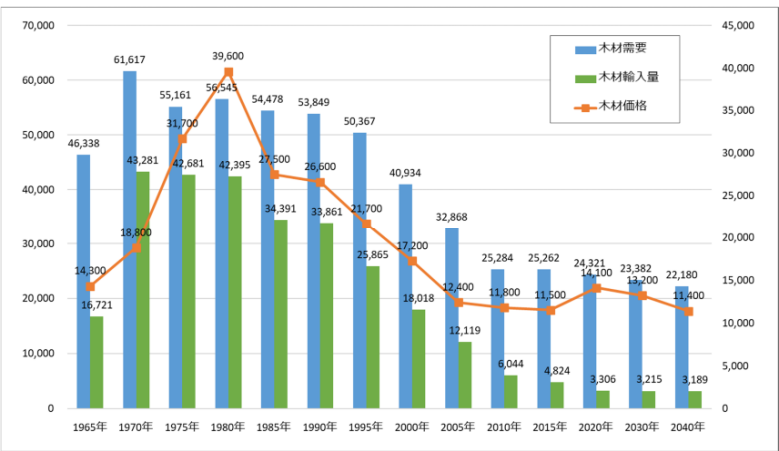
問 2. 未来市には、たくさんの魅力と地域資源があったはずです。あなたなら、①いつ（1970 年代など）、②未来市のどのような強み（地域資源など）を活かして、③どのような施策を講じて、未来市の衰退を止めていたでしょうか（地域活性化策）。あなたの考えを書きなさい。なお、時期や主体、取り組み内容が異なる複数の施策を提示しても構いません。

未来市の統計データ

【図表 1】 未来市の総人口（人）・高齢化率の推移

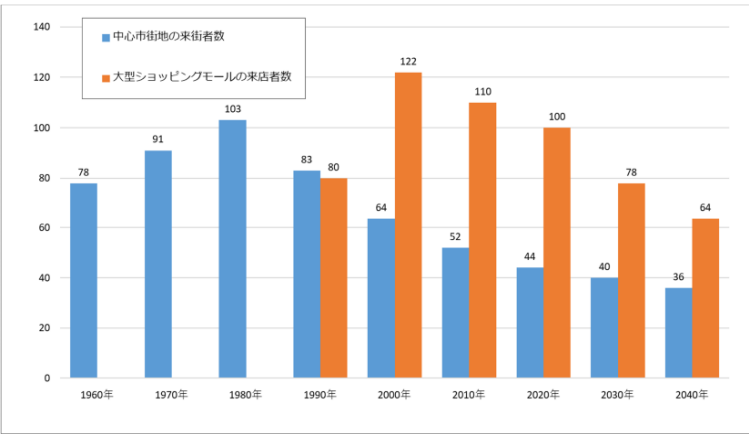


【図表 2】 木材需要（千㎡）*1・木材輸入量（千㎡）*2・木材価格（円）*3の推移

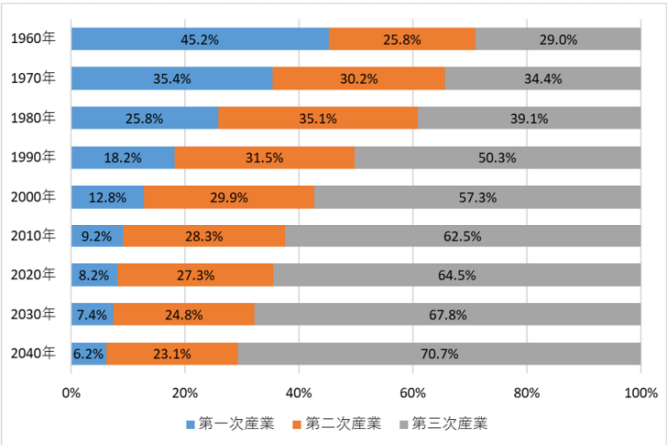


*1 国内消費・製材用材
*2 丸太
*3 すぎ丸太（径 14～22cm,長 3.65～4.0m）

【図表 3】 中心市街地の来街者数・大型ショッピングモールの来店者数の推移（万人/年間）



【図表 4】 産業別就業人口割合



【図表 5】 未来市の観光客数の推移（万人/年間）

